あの日、私を支えてくれたもの

柳川市立柳城中学校

三年一組　荒巻美晴

今年の四月、私は初めて救急車に乗りました。

その日は、登校したときから腹痛がありました。私たちは今年高校受験で、三年が始まったばかり。保健室を一度利用したものの、受験などに影響してほしくないという思いから、早退をせずに次の授業へ戻りました。しかし、だんだん呼吸が苦しくなり、次の授業が始まると突然、強いめまいと腹痛に襲われました。目の前が何も見えなくなってしまいました。今まで経験したことない感覚に、恐怖と苦しさでいっぱいになったのを覚えています。友達や先生の声が聞こえる中、しばらくすると救急隊の方が来てくださいました。私は救急車へ運ばれ、車内でいくつかの検査を受けました。私の周りには、友達や先生、救急隊の方など、たくさんの方がいてくれて、不安で

20 × 20

いっぱいだった私は大きな安心感に包まれました。

そのときの私は、自分を助けてくれた人たちへの感謝でいっぱいで、救急車や救急隊の活動がどのように支えられているのかまで考える余裕はありませんでした。しかしその後税についての調べたとき、消防や救急の活動も税金などの社会全体の支えがあって成り立っていることを知りました。それを知るまで私は正直、税金は「大人が働いて納めるもの」「さらに払わなければならない余計なお金」というイメージを持っていました。自分はまだ中学生なので、税金は買い物の時くらいしか自分とは関係のないものだと思っていました。しかし、今回の経験で、私たちは知らないうちに税金によって支えられているのだと気づくことができました。

税金は他にも、道路や学校など、私たちが普段当たり前のように利用しているものを支えています。それだけでなく、突然困ったと

きなどに人を助けるという重要な役割を担っています。私があの日感じた安心感も、友達や先生、救急隊の方々の存在だけでなく、それを支える税金という社会の仕組みがあったからこそだと思います。

私は今回の経験を通して、税金に対する考え方が、ネガティブなものからポジティブなものへと百八十度変わりました。税金は、ただ納めるだけのお金、余計に払わなければいけないお金ではありません。多くの人の生活を支え、困っている人や助けを求めている人に手を差し伸べ、社会を支えるためのものであると私は考えます。

私たち中学生はまだ、働いて税金を納めることはできません。しかし、将来自分が税金を納める立場になったとき、四月に経験した、あの日救急車の中で感じた安心感を忘れないでいたい。そして今度は、自分が誰かの安心を支える側の一人になることができたらと考えている。

あの日、私を支えてくれたもの。それは税金だった。

20 × 20